

うるわし通信



一般社団法人
うるわしの桜井をつくる会
〒633-0091 奈良県桜井市
桜井1259エルトさくら内
TEL&FAX:0744-43-7773
URL : <http://lets.some.jp>
E-mail : lets@some.jp

令和4年01月

新年のご挨拶

会員の皆様にはうるわしく新年をお迎えのことと存じます。

世界を襲ったコロナ禍も2年が経過し、日本ではようやく沈静化していますが、また新たな変異株が世界で急拡大していてまだまだ油断できない状況が続いています。

人類の歴史の中で疫病の大流行は文明の転換点になってきましたが、コロナ禍においても、急速に次の時代の幕開けが現実のものとなってきました。

一番顕著なのはオンライン会議の急速な普及です。国内はもちろん海外にも広がるネットを利用した会議が簡単に出来るようになりました。わざわざ出張しなくてどれほど助かるか、大都会のオフィスも満員電車通勤もおさらばです。外交からビジネス、教育に至るまで大幅にオンラインが活用され、社会の至る所で常識が覆り構造変革が進んでいます。それによって逆に、オンラインではどうしても出来ない事柄があぶりだされ、人にとって移動の自由、対面交流の自由がいかに不可欠で重要であるかも明らかになりました。



オンラインと対面併用のハイブリッド方式など新しいライフスタイル、新しいビジネススタイルが急速に普及する中、困ったことに人手不足と人余りが同時に進行しています。つまり急速な時代の変化に適応できる人は、極端に不足している一方、取り残される大勢の人たちがいます。国のデジタル庁も順次施策を打ち出しますが、デジタル弱者解消のためには長い年月がかかるでしょう。当面は家族、友人、知人、お隣同士がお互いに助け合い学びあいながら生きてゆかねばなりません。

ポストコロナ時代のキーワードは他者への貢献といえます。住みよいまち、幸せを感じるまちづくりにはこうした助け合いを基本に公と民の協働が不可欠と言えます。

財源難で進まないまちづくりもふるさと納税、企業ふるさと納税、クラウドファンディングなどの多くの志を集める新しい工夫も広がっています。見通し不透明な冬の時代ですが、一つ一つ課題解決に向けてまずは動かなければならないと思います。冬の時代に地中に根を張ってこそ春の花は大きく咲くのですから。

2022年1月1日 (一社)うるわしの桜井をつくる会 会長 堀井良殷

ボーダレスアートミュージアムNO-MA 見学会に参加して

うるわしの桜井をつくる会も構成団体である『卑弥呼の里芸術祭実行委員会』が主催する標記見学会が、11月20日（土曜）に行われ、本会からも3名参加した。

◆ボーダレス・アートとは◆

これまでの4年間の卑弥呼の里芸術祭で、「障害のある人もない人も 共に」のテーマの活動を通じて“ボーダレス・アート”という取組みを知ることとなり、実際に作品鑑賞の実体験することとなった。



訪問先のボーダレスアートミュージアムNO-MAは、2004年6月に滋賀県近江八幡市に開館された社会福祉法人が運営する美術館で、ボーダレス・アートの意味は、障害のある人たちによる造形表現や、現代アートなど様々な表現を分け隔てなく紹介し「障害のある人のため」という限定的な役割を担うのではなく、訪れた人々に「芸術」とは何か、「表現」とは何かを考えてもらえるような場でありたいとする展示コンセプトを持っている。

*ボーダレスは、「福祉と文化の交差」「アートとまちづくりとの協働」「障がいの有無」という境目を超えた魅力ある場所をめざしていると、NO-MAのホームページには紹介されており、共感する活動である。

◆当日の行程と参加構成団体◆

参加は、さくらい人権ネット・文化を考える桜井市民の会・桜井市手をつなぐ育成会・社会福祉法人 虹の郷 指定障害福祉サービスセンター双葉・卑弥呼の里芸術祭 協力者と、本会メンバーの計15名であった。昼過ぎに近江八幡市の重要伝統的建造物群保存地区内にあるNO-MAに到着し、13時より14時30分まで学芸員の山田さんより、今回の展示テーマである“79億の他人～この星に住む、すべての「わたし」へ”の趣旨や、個々の展示作品についての解説を丁寧にして頂いた。

◆展示内容◆

民家を改修したNO-MAは、木造二階建てで、見学者に配慮してエレベーターの設置などがされていた。今回の展覧会では12名の出展者による、人と人との間の差違、あるいはその差違の上でのコミュニケーションがどのように編まれるかを、写真や絵画、映像、粘土など様々な手法で表現がなされていた。

具体的には、身体、人種、性、思考、社会的立場等々の違いを認め合ったうえでの相互理解をどのように図るのかをアート作品を通じて理解する場を提供されていた。身体に関わっては、1色覚（＝全色盲）の人の見る世界、盲ろう者が触ることによって他者との言葉を交わす触手話、重症心身障害者と支援者による共同の表現活動など。また、現在アートによる自分と他人との関係性の見直しなど、さまざまな作品展示は、従来の社会的に認知された領域の美術作品を示す概念ではなく、その領域の外側にある表現作品としての多様性や価値観の見直しを迫るものであった。





◆参加者の感想◆

- 障害と一口で言っても本当に多種多様で、私の認識の浅いことを痛感しました。 障害の重い人達を理解し向き合いながら支えておられる方、そしてより多くの方々の支援の下に活動がなされ、その相乗効果のある取組みに感心しました。(A)
- 障害の有無を問わず、多岐にわたる潜在能力を引き出し、アートによる街づくりの取り組む姿勢に感動しました。(B)
- 自治体や多くの社会福祉法人が運営に積極的に力を入れていることを感じました。桜井でもそのようになればと期待します。(C)

◆今後の取組み◆

第5回卑弥呼の里芸術祭は、本年3月5日(土)に音楽交流イベントと作品展示会を市立図書館で実施。
【テーマ】燃ゆる春!ここに手をつなぐとして、地元和太鼓チーム「ひびき」と不思議なトリオ～尺タンピ(尺八・タンバリン・ピアノ)～の演奏が行われる。

主催 第5回卑弥呼の里芸術祭実行委員会

協力団体 桜井市障害者(児)団体連合会

後援 桜井市・桜井市教育委員会・桜井市社会福祉協議会・桜井市民生児童委員連絡協議会

(1)音楽交流イベント (詳細はチラシ等を参照)

実施時期 2022(令和4)年3月5日(土) 14:00~15:30

会場 桜井市立図書館 第1研修室 (開場 13:30~)

(2)作品展示 2022(令和4)年 2月20日(日)~2月28日(月) (予定)

桜井市立図書館入口ロビー



写真は、一昨年の作品展の一部です(市民会館ロビーで開催)

(楠木 克弘)

土舞台顕彰会セミナー報告

11月12日に飛鳥学院保育所ホールにて土舞台顕彰会セミナー『奈良の城から見た歴史』が開催された。

講師の城郭考古学者 千田嘉博教授は愛知県生まれ。中学校1年生の夏休みの旅行中に姫路城に感銘を受けて調べたことがきっかけで城ファンとなり、中・近世の城跡探検をはじめ、わが国における城郭の考古学的研究方法を新たに開拓し確立した第一人者である。踏査地域は日本国内のみならずヨーロッパ、中国、モンゴル、ロシア等2000か所にのぼる。テレビにも多数出演されており、わかりやすい説明には定評がある。



飛鳥学院保育所ホール

【日本三大山城＝高取城】

高取城は、岡山の備中松山城、岐阜の美濃岩村城とともに日本3大山城一つに数えられている。天正13(1585)年に百万石を超える大和、紀伊、和泉の大領主として郡山城に入城した豊臣秀長(秀吉の異母弟)が、大改修を命じ巨大化。城の周囲は30kmあまりでこれは姫路城と同等の規模とされ、天下統一を果たす豊臣政権のスケール感を今に伝える。

しかし明治6(1873)年に廃城後放置されたうえ、壮麗な石垣が考古学的な記録もされず、樹木などで崩壊する惨状が目立ち、全国の国史跡の城跡で高取城ほど基本的な管理を放棄している例を知らないと、県の文化財行政に警鐘を鳴らす。

【先駆けの城づくり＝信貴山城と多聞城】

すごさを秘めた奈良の城はまだある。NHK大河ドラマ「麒麟がくる」で注目された松永久秀の信貴山城(平群町)は、全国屈指の戦国期拠点城郭が、ほぼ未発掘の状態で見捨てられている。同時期には織田信長(岐阜城)や上杉謙信(春日山城)も山の上に居住していた。天正5(1577)年信長に反抗した久秀はいわゆる信貴山上の戦いで追い詰められ、天下の名宝「平蜘蛛茶釜」とともに自爆したと伝えられている。周辺は遊歩道などの環境整備も進み、自然散策を楽しみながら尾根筋に武家屋敷群が想像できる。特に久秀の住まいは安土城に負けないほど豪壮華麗であったとされている。

久秀のもう一つの居城、多聞(たもん)城(奈良市法蓮町)は、宣教師ルイス・デ・アルメイダが狩野派による障壁画や金箔(きんぱく)で彩られた美の極致の城として絶賛。姫路城のような白漆喰の城であった。若草中学校建設により遺構の主要部は破壊されているが、久秀が千利休や当代一流の文化人を招いた茶室の遺構は残っていることが期待される。

戦国時代の山城は上記のほか宇陀松山城や400以上の遺跡があるとされ今後の発掘整備が期待される。参考：千田 嘉博著『城郭考古学の冒険』(船谷晴夫)

【編集後記】 シリーズ【人口減少・少子高齢化】の第2弾は、紙面の関係で次回に掲載させて頂くこととなったので、ご理解いただきたい。

さて、コロナ禍の影響で、地域の諸行事や諸活動も「自粛」で中断が相次ぎ、人と人との交流の途絶や活動の停滞を招いており、「ニューノーマル」時代への対応が強く求められる。

地方自治体に対しては、従来型の企業誘致よりも企業がより一層地域に深く入り込む「企業のふるさとづくり」として、地域課題の解決に取り組む新たなプロジェクトづくりの必要性を提起する意見もある。当会としても10周年を節目に新たな取り組みを進めていくことが求められている。(編集子)

うるわし通信発行人
高瀬 安男
TEL:090-1678-9157